

巻頭言

## 第三世代としてのヘルダーリン編集をめざして

明星聖子

私たち研究グループは、数年前より「第三世代の編集」というテーマで、新たな取り組みを始めている。第三世代の編集とは、一言でいえば、研究者と一般読者に橋を架ける編集である。第一世代を、作品を世に普及させたテキスト、第二世代を、それを研究する研究者によって学術的に編集されたテキストと見たとき、第三世代としてどんな編集が考えられるか。第二世代の批判版（校訂版）や写真版は、作品成立過程をめぐる重要な情報を数多く提供している。が、それらのほとんどは、研究者以外には非常に解読の難しい書物である。作品理解に大きな影響を与える貴重な情報の宝庫であるそれらを、より広い層の読者に伝えるにはどうすればいいのか。

この問題を思考するにあたって、最初に着目したのが翻訳である。第一世代の普及版の翻訳では問題にならなかったことが、第二世代の翻訳においては、作業の第一段階での高い障壁として立ちはだかっている。例えば、批判版の編集資料において詳細に提示されているヴァリエーションをどう取舍選択して、訳文に取り込めばいいのか。すでに日本には、批判版や写真版といった学術版を翻訳したという書物がいくつも存在している。が、それらの翻訳に際して、その種の障壁がどう克服されたかといった点は、ほとんど議論されてこなかった（よく考えてみれば、例えば写真版を翻訳する—ときには「手稿から直接訳する」とも表現されている—といったことは、原理的に不可能なはずなのだ）。

ようするに、これまではブラックボックス化されていたその障壁克服の過程を、あえて編集という言葉で取り出して可視化したらどうなるか。それを検討することによって、第二世代の、ある意味複雑怪奇で情報過多なテキストを、その本質的価値を損なわずに、シンプルに整理する方策が見つけられるのではないか。別の言葉でいえば、次の世代の、アウトリーチ的な学術版編集に関する重要な手掛かりが得られるのではないか。こんな問題意識から、翻訳における編集という課題に、まずは取り組んでいる次第である。

ごらんになっていただければおわかりのように、ここで披露しているのは、端緒にいたばかりの試みの成果である。担当者各自もふれているとおり、課題は山積みで、その入り組んだ課題の所在を確認するために、手を動かすところから始めた段階といえる。一般読者への橋を架けるような編集そして翻訳というゴールには、まだ遠い道のりがあるだろう。しかし、その道のりの長さを認識しているからこそ、中間報告を重ねて、課題の数々を順次共有していこうと考えている。

私たち研究グループは、ヘルダーリンのみならず、カフカ、ムージル、シェイクスピア、パスカル、ダンテ、その他第二世代の編集がすでになされている古典作家たちのテキストを対象に、第三世代の編集をめぐる検討をおこなっている。ここで誤解のないように付け加えておけば、第三世代の編集は、けっして第二世代の編集を無効化しようとか、凌駕しようといったことを目論むものではない。むしろ、その逆であり、第二世代

の編集の価値を正しく認識して、その活動の継続を支援していく役目を担うことを志向している。第二世代の編集は、従来は史的批判版といった重厚長大な書物の制作を目指していたが、近年ではデジタル・エディションという軽やかな装いの、しかしはるかに膨大な情報量を蓄えたものを世界各地で次々と生み出している。この動きは、今後ますます盛んになるはずであり、それら新しいテキストを、大学生や文学愛好者に正確に伝えるための検討は、一層重要になるとと思われる。

専門の研究者、とくに文献学的アプローチに重きを置く研究者がふだんは何を<読んで>いるのか。文学テキストを、成り立ちから理解して読む楽しみ、深層の複雑さを吟味して読む醍醐味を、できるかぎり多くの人々と分かち合っていきたいと、私たちは望んでいる。

最後になるが、本書の研究報告は、日本学術振興会の科学研究費助成事業（科研費）基盤研究(A)（2022年度～2026年度、課題番号22H00008）「第三世代としての編集—古典の再生と文学研究の活性化をめざす編集文献学的研究」（研究代表者：明星聖子）の助成を受けている活動の成果の一部である。ここに記して、謝意を表する。